

## 謎の寺院見つかる！

奈良時代の山背国は、木津川を利用して都に送られる物資や人の往来が頻繁にあり、そのため遺跡や寺院跡が数多く分布しています。その中のひとつに木津川市<sup>ほばみなみ</sup>馬場南遺跡があります。

この遺跡は、街道からやや離れた谷部にあり、調査前は須恵器や瓦の焼成した生産遺跡と考えていましたが、発掘調査を進めていくと「神雄寺」・「神尾」・「神寺」と墨書された土器が60点以上出土したことから、この遺跡が「神雄寺」であることがわかりました。

奈良時代、現在の奈良市を中心に平城京が造営され、藤原京から大官大寺<sup>たいかんたいじ</sup>・本薬師寺<sup>もとやくしじ</sup>などが移転され、新たに藤原氏の氏寺である興福寺、国分寺の総本山である東大寺などが造営されます。

これらの寺は奈良時代を代表する大寺院ですが、この当時、修行の場として山林に堂を設けた山林寺院や、個人の信仰のために私邸に祠を設けた持仏堂なども造られています。

馬場南遺跡の場合、狭い谷地形の中に小さな礎石建ちの建物跡(本堂)があり、その前面には掘立柱建物跡(礼堂)が造られています。礼堂の建物は丘陵部を平坦に造成して造られ、平坦地の前面には



川を利用した溝が見つかっています。川跡の斜面からは6,000枚以上の灯明を燈す素焼きの皿(灯明皿)<sup>とうみょうざら</sup>が500枚程度のグループで数度にわたり廃棄された状況がわかり、この場所<sup>ねんとうくよう</sup>で燃灯供養がおこなわれたこ

礎石建ちの本堂(馬場南遺跡:木津川市教育委員会提供)

とがわかりました。出土

遺物のなかには当時では最高級品である釉薬を施した三彩・単彩（緑釉）の壺・皿・香炉などの多彩な仏器、山や波を表現した彩釉山水陶器など、皇室・高級貴族しか持ち得ない遺物が出土しています。この遺跡は出土した土器の特徴から、聖武天皇が平城京から恭仁宮に遷る時期に始まり、都が長岡京・平安京に遷る時期に廃絶していることもわかりました。

特に注目される遺物として、万葉集巻十の2205にある「秋萩の下葉もみちぬあらたまの月の経ゆけば風をいたみかも」を、一字一音の万葉かなで書かれた「歌木簡」が出土しました。これまでに滋賀県甲賀市紫香楽宮<sup>しがらきのみや</sup>、奈良県明日香村石神遺跡<sup>いしがみ</sup>で万葉「歌木簡」の出土が知られており、全国で3例目の出土となります。

「神雄寺」には本堂と礼堂が前後に配置され、その前面の広場では数千枚の皿に火を灯して燃灯供養<sup>ねんとくよう</sup>がおこなわれていました。また建物の中では多彩な彩釉陶器が用いられ、法会が営まれたことが想像できます。時にはこの寺に貴族たちが集い、歌会も行われていたようです。



歌木簡

皇室・高級貴族しか持ち得ない山水彩釉陶器が出土していること



三彩陶器（馬場南遺跡）

とから、この遺跡は聖武天皇・光明皇后、相楽郡に別業（別荘）をもつ橘諸兄などが関与していたと考えられます。「神雄寺」は正史に記載されない『謎の寺』として、発掘調査によって現在に蘇りました。

（石井清司）